



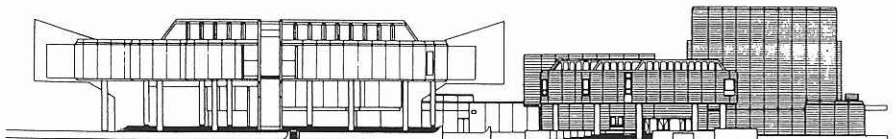
鳥形木製品 弥生時代
詫田西分遺跡 千代田町教育委員会蔵
佐賀県重要文化財

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ARTMUSEUM

25 March 2005

No. 134



展覧会報告

博物館常設特別展「くらしを映す木器—古代の木工—」展について

平成16年度博物館常設特別展「くらしを映す木器—古代の木工—」展（以下「木器」展）が済んだばかりだが、とりあえずふりかえることにしたい。

1. 展覧会のねらいと準備

一昨年の秋平成16年度の常設特別展のうち一般対象を考古の展覧会でを行うこと、そして考古でも保存処理がかなり進んだ「木器」で行うこと、「木器」をたくさんつかった展覧会は今までほとんど行われておらず、「木器」は土器、石器、金属器などに比べより古代の生活をリアルに再現可能である、ということで担当することに決まった。そして、古代の生活やくらしを「映す」をキーワードに展覧会を仕立てることになった。

当初書庫の木器の展覧会に関する図録を探したが、何十冊もある考古の展覧会図録中たった3冊しかなかった。予想以上の少なさに愕然とし、これからの先行きに暗雲を覚えた。ましてや木器といえはしばらく前まで出土した資料を水漬け保存するのがまだ一般的であり、保存処理されたものでなければそのままでは展示できないので、県内の木器を網羅するような展示は行われたことはなかった。

しかし県および各市町村教育委員会の努力により、ここ10年ほどの間に急速に木器の保存処理が進められ、展示に耐える資料が蓄積されてはいたが、それでも不十分と思えた。特に建築材などのように保存処理に時間がかかる大型の部材は処理が難しく展覧会に出せるものは少ないように思えたのである。また一言で木器といっても農具、狩猟具などの生産用具をはじめとして建築材、日常生活、祭祀用具、戦闘用具に至るまできわめて広範囲の内容になり土器など他の考古資料の用途、機能に比べてはるかに多様であって、展覧会に仕立てるのも容易でない。また、保存処理が進んだものでもともと全体の一部分しか出土しておらず、そのまま見せてもどのような道具かよく分らないものが大半である。

そこで、資料選定にあたっては、できるだけ「一般の来館者が見ても形がわかるもの」と背の高いケース

を使用するため、展示効果を配慮し「大きいもの」の二つの視点からリストアップすることにし、平成16年3月から9月まで調査した。

その結果、佐賀県内7、福岡県内3の10機関で保存処理が終了し、展示可能なものとして約500余件の資料が調査できた。

そして当初は縄文から中・近世までを通した内容を考えていたが、弥生・古墳時代の資料が大半で、それ以外の資料が少ないことから、時代を弥生・古墳時代に限り、民具や樹種標本を参考資料に使うことにした。

以上の結果、資料数を最終的に計219件239点にして、6つの展示構成を考えた。以下展示構成にしたがいの内容を概説する。

2. 展示構成

(1) 木器をつくる

弥生・古墳時代などの古代の木器づくりの特徴を示すために、原木から割りとりられた素材、製作の過程を示す未製品、素材づくりの困難さから徹底して使用されたことを示す再利用品などとこれらを作るための石斧、鉄斧やそれらの木製柄などの工具類を展示した。

(2) 古代の匠

弥生、古墳時代の木器の中から細工に手の込んだ製品を選んだ。たとえば脚や取手まで一木を削り抜いて作られた弥生時代の容器類と弥生時代の終わり頃か



把手付容器 弥生時代
 詫田西分遺跡 千代田町教育委員会蔵
 佐賀県重要文化財

ら登場する板を組み合わせて作る^{うしろもの}指物作りの^{あん}案（机）や、朱や黒漆を組み合わせて彩色した容器、弓など古代の木工技術の水準を示すような「名品」を展示した。

(3) はたらく木器

農具、漁労具などの生産用具のコーナーであるが、大半が農具になった。弥生・古墳時代の木製品の大半は農具であり点数70点は、全出品点数の中でも3分の1近くを数えた。日本最古の農具といわれる唐津市業畑遺跡の農具（複製品）から始まり佐賀・福岡の代表的な農具を弥生早期から古墳時代まで展示した。特に、三日月町土生遺跡出土の弥生中期前半の^{あき}踏み鋤と弥生時代終末まで遡る可能性がある多久市ハツ溝遺跡出土の馬鍬は今回の展示会で一番の話題になった資料である。

一方、農具と対照的に狩猟・漁労具は数が少なかったが弓、タモアミの他、舟底の水を汲むアカトリなど貴重な木器が展示された。

(4) 暮らしの木器

建物の柱、鼠返し、扉、^{いしご}梯子などの建築材や井戸枠、木靴、天秤棒、機織の部品、背負子、木蓋、匙、柄杓類など日常生活にかかる木器を展示した。特に建築材では長さ約4mの千代田町黒井遺跡出土の弥生時代中期の梯子や三日月町土生遺跡井戸枠、福岡県夜須町惣利遺跡の古墳時代の扉など大きな木器が並んだ。また、同じ土生遺跡で出土した2mを超える柱には明らかに金属器と分かる刻みキズが多数残り、弥生時代中期前半という早い時期の資料であり注目された。

(5) 折りの世界

武器形、動物形、楽器など弥生～古墳時代の祭祀に使われた木製品を展示した。細形銅剣そのものを映した牛津町生立ヶ里遺跡の木剣やササラ、ササラゴの楽器のセット（弥生時代中期）、惣利遺跡の大型の琴（古墳時代中期）などの貴重なものが並んだが、特に千代田町詫田西分遺跡の鳥形木製品、前原市上籙子遺跡の水鳥形木製品や犬（？）形木製品、吉野ヶ里遺跡などの船形木製品は具象的な^{かたし}形代であり、人物や鹿、猪などを線彫りした^{せんかくは}線刻板とともに人気を博した。

(6) 戦いの木器

古代の戦闘で使われたと考えられる木器も意外に豊富である。神埼町野田一本杉遺跡の^{たかこ}短甲や生立ヶ里遺跡の^{たかこ}短甲小札と考えられる^か鎧類、那珂川^{なにかがわ}休遺跡の盾を

はじめ佐賀・福岡県内諸遺跡から出土した剣の柄、弓、木鏃や鎧、鞍などの馬具類などを展示した。

<特設コーナー>

また、「巨木は語る」として特設コーナーを設け、9万年前の阿蘇の大火砕流によって倒され、生木のまま保存されていた上峰町八藤遺跡の太古木と約5200年前土砂崩れによりやはり生木のまま保存された富士町上無津呂の^{かや}カヤを展示したが、太古の大規模な自然災害を生、しく伝える資料は観覧者の関心をよんでいた。

以上のように今回の展示は「木器尽くし」の展示会であった。木器に限らず考古資料の展示は、そのまま並べるだけではわかりづらいものが多いが、今回の資料も全体を残すものが少なく、ほとんどがその一部を残すものであった。そのため可能なものは、復元模型や現代民具を並べ、全形や使われ方がわかるように努めた。また、今回の資料はほぼ全部が褐色であり、そのままではきわめて単調であるので、明るい色調の色紙を敷くなど工夫した。



子ども土曜クラブの様子

会期中に5回の展示案内を実施し、概ね好評だったが、特に2月19日は、博物館の「子ども土曜クラブ」も実施し44名の小中学校生が参加するなど、一般や若年層向けの対応も試みた。一方で土生遺跡の日本で初めて確認された朝鮮式農具の「踏み鋤」や最古級の井戸枠、農具の歴史を塗り替える可能性のあるハツ溝遺跡の「馬鍬」などの話題資料を公開し、福岡はもとよりわざわざ京都・東京から来館した研究者もいるなど一定の成果を上げた。会期中の来館者は6,745名であった。（資料係長 家田淳一）

調査ノート

岡田三郎助の生家について

小倉から長崎へ至る長崎街道は、佐賀城の北を武士の住む小路屋敷を挟むようにして、東から西へと走っている。この長崎街道と佐賀城北堀との間に、屋敷地と松原があり、そこを東西に八幡小路が並行する。

昭和61年(1986)、佐賀市教育委員会はこの小路に二つの石標を建てた。碑文はひとつが「洋画家久米桂一郎誕生地」、他のひとつが「洋画家岡田三郎助誕生地」である。久米の生誕地に当たる民家の庭には「邦郷霊神」(邦郷は桂一郎祖父)と陰刻された自然石が樹下に佇む。それは曾て屋敷の門前に据えられていたものであり、自ずとここが久米家ゆかりの地であることを証している。そして、通りを挟んで斜交いに見えるのが旧武家屋敷の門で、その門前に岡田誕生地の石標が置かれているのである。

この岡田生誕の地とされる屋敷跡は、その長屋門が遺存し建築年代は不明ながらも、江戸時代の様式をとどめた武家屋敷門として佐賀市重要文化財になっている。八幡小路に残る貴重な江戸時代の屋敷跡であるが、はたしてそれが都合良く岡田生家に当たるものなのか。このことを以下において検証したい(じつは市教委としては設置の根拠はそれほど明瞭ではない)。

まず、岡田の履歴に関して基本資料となるのは、東京藝術大学に残された「学業官職賞罰等」の履歴書で、そこには、岡田三郎助は「旧姓石尾 明治二年一月十二日佐賀県佐賀町八幡小路ニテ生ル」とある。また、岡田死去の5ヶ月後に開催された「岡田三郎助遺作展覧会」(東京府美術館)の年譜には「一月十二日石尾孝基四男として佐賀県佐賀町八幡小路に生る。幼名石尾芳三郎」とある。ただし「四男」とあるのは「三男」の誤りであるが、いずれにしても八幡小路に岡田は生まれた。さらに唯一、岡田自身が生家について触れた文章がある。昭和9年(1934)、久米桂一郎を追悼した一文に「久米先生と私は同郷で、(中略)国では私の家の筋向ひに、先生のお住居があったと云ふ話を先生から聞いてみました」(傍点筆者;「久米先生と私」アトリE11-9)とある。しかし、これらのことからただちに岡田の生家を現在の生誕碑の設置箇所に重ねることはできないだろう。さらに検討を加えるべきである。

まずその一つが、幕末期の絵図の検索であり、もうひとつが家系図による傍証である。

さて、当該の絵図としては、天保3年(1832)以前の「御城下絵図」(鍋島報効会蔵)がある。それによれば久米家に相当する箇所には、「久米文吉」(久米邦郷の通称か)の名が見える。しかし石尾家については、八幡小路沿いにその名を見出すことができない。かの岡田生誕地の石標が建つところには、「鍋島弾右衛門抱」の屋敷地があり、さらにその西隣二軒先までが同じ「鍋島弾右衛門抱」となっている。年代からみて、弾右衛門は鍋島家老の太田鍋島家十二代、茂矩(監物)であろう。そして抱地ということから、その家臣等の住まいになっていたものと思われる。

ここで次のことが考えられよう。石尾家は天保3年以降、八幡小路に移り住んできたのか。ちょうどこの頃、大隈家が佐賀城下会所小路(現在の大隈重信記念館脇の生家)に移り住んだように。それとも、岡田の母方である中野家において三郎助は生まれたのか。嘉永2年(1849)以降、中野家が八幡小路に移り住んでいたことが中野家系譜において確認できる(中野益明の第四子までは佐賀郡草場村生まれであり、マキ以降は八幡小路に生まれている)。その八幡小路の屋敷の場所とは言えば、三郎助の母、多免の父中野益明がつぎつぎと鍋島某組に属しており、益明がその後鍋島弾右衛門の抱地のひとつに住まいしたと想定することは可能だろう。とするならば、岡田の生家が鍋島弾右衛門抱地のいずれかの屋敷であったと見なすことはできる。

これを以て結論とすべきであろうか。しかし、現在の誕生碑を生誕の地とするにはなお猶予を置きたい。

最後にこの調査の過程で、岡田の父で維新後検事となった石尾左源太孝基は、幕末佐賀藩の尊皇派の同盟である「義経同盟」に参加していたのではないかとの情報を得た(県立図書館近世資料編集室長 大園隆二郎氏のご教示による)。そうであれば、副島種臣、大木喬任、江藤新平、大隈重信らの盟友として同じ志に生きた父孝基、これまで陰の中にあつた岡田の父親像にかすかな光が映らう。(芸学課長 松本誠一)

石尾家・中野家の系譜

石尾教榮 (又兵衛)



「旧錦鳥動物園敷」長垣門(八幡小路)

左源太文教 (後孝基)

天保3年(1832)1月生
弘化3年(1846)7月29日家督
明治35年(1902)9月21日没

多女 (中野忠太夫娘)

駒次郎 (小池栄一郎養子)
元次2年(1865)5月5日没

多免

佐賀県士族石尾左源太孝基妻
天保9年(1838)12月4日生
佐賀郡草場村。
安政2年(1855)12月17日帰ぐ

喜一郎 早世

天保12年(1841)12月2日生
佐賀郡神野草場村

中野益明 (忠太輔)

文化10年(1813)11月26日生
肥前国佐賀郡
慶応3年(1867)2月3日没
佐賀郡八幡小路



《中野健明像》明治20年代後半



《中野喜英像》大正時代

健明

弘化元年(1844)9月24日生
佐賀郡神野草場村
明治6年(1873)9月12日外務一等書記官
仏国公使館勤務
明治13年(1880)3月8日外務一等書記官
和蘭国公使館勤務
明治19年(1886)3月9日大蔵省関税局長
同月26日大蔵省主税局長兼務。
明治23年(1890)1月7日長崎県知事
明治26年(1893)3月10日神奈川県知事
明治31年(1898)5月12日没

喜美

佐賀県士族副嶋重雄妹
嘉永4年(1851)10月8日生
佐賀郡田代小路
明治元年(1868)12月12日帰ぐ

茂奴

佐賀藩士族古川源次郎徳主妻
弘化4年(1847)7月19日生
佐賀郡神野草場村
万延元年(1860)某月帰ぐ
文久2年(1862)11月22日没

マキ

長野県士族吉田丈治妻
嘉永2年(1849)12月23日生
佐賀郡八幡小路
明治11年(1878)11月東渡にて帰ぐ

次郎助

嘉永4年(1851)11月26日生
佐賀郡八幡小路
明治元年(1868)6月25日没
会津戦争 (今市の役)

猪作 早世

安政2年(1855)10月29日生
佐賀郡八幡小路

峯 早世

安政4年(1857)1月12日生

亀袋袋 (後ひろ)

安政5年(1858)12月27日生
鹿児島県士族日高次郎に嫁す

房 (後スガ・須賀)

文久元年(1861)12月28日生
中野信陽に嫁す

兵太郎 (後一郎助)

文久3年(1863)12月27日生

政二郎 (木下家養子)

慶応2年(1866)6月7日生

三郎助 (初芳三郎 岡田家養子)

明治2年(1869)1月12日生
昭和14年(1939)9月23日没



《中野道明像》大正6年頃



《中野多津像》明治20年代末

道明

明治13年(1880)1月4日生
東京市芝区桜川町20番地

多津

明治17年(1884)8月10日生
東京市芝区桜川町20番地

登志

明治20年(1887)5月12日生
東京市芝区桜川町20番地

知明

明治21年(1888)11月5日生
東京市芝区桜川町20番地
明治28年(1895)2月10日中野信陽養子

英明

明治24年(1891)4月9日生。
長崎市岩原郷1153番地(知事官舎)



《中野次郎助像》明治20年代



《中野信陽像》大正時代

スガ (美女)

石尾左源太孝基二女

信陽 (婿養子)

副嶋重雄弟

《石尾家系譜・中野家(分家)系譜より作成》
※本頁の肖像画の筆者はいずれも岡田三郎助

資料紹介

作家たちの息づかい—佐賀美術協会の「會寶」について(1)

佐賀県立美術館では、平成15年度美術館20周年記念企画展「近代洋画の開拓者たち—アカデミズムの潮流—」にて、久米桂一郎と岡田三郎助をはじめとした、東京美術学校の人脈によって1913（大正2）年に結成された「佐賀美術協会」（以下美協）およびその展覧会（以下美協展）について触れ、中央の美術—美校、白馬会系列の画家が中心となり形成されたアカデミズムの地方への伝播について紹介した。

その様相と実態をしめす貴重な資料が残っている。今回から2回にわたり、美協および美協展の「會寶」について紹介したい。

美協の「會寶」

「（佐賀美術協会の）展覧会に関する記録は第一回から山口亮一、田中宗一、山口孝行、其他関係者によって極めて自由にその都度記載されて今日まで続けられて居る。私共はこれを“會寶”と呼んでいる。特に創設時代のページを聞いてみると先輩達が如何に心を合せ、苦勞を共にしていたかが偲ばれる。」

山口孝行「佐賀美術協会の思い出（一）」

（「新郷土」所収、新郷土刊行協会、昭和47年11月1日）

「會寶」は、美協の中心作家である山口亮一らが、美協展（1914年より年1回開催）にまつわるあらゆる出来事、所感等を記した雑記・日記ともいべきものである。これらの大部分は展覧会会場受付にて筆記されたもので、当時の参加作家の心情、そして佐賀県美術界の様相が活写され、時代ごとの雰囲気さがみごとに伝わってくる。

現存する「會寶」は全部で12冊（1～12号）で、いずれも市販の小型大学ノートに筆記されたものである。各巻には後年の補である表書があり、一号につき複数年の記載があることがわかる。実際の記述は1916（大正5）年の第3回展から始まり、1971（昭和46）年の第54回展で終わっている。内容は来場者の様子、運営の打ち明け話、会場受付時の会員の雑談や出品作品の所感等幅広く、出品作家たちによる挿絵がふんだんに

入っている。さらに、当時の入場券や新聞記事の切り抜き、会場風景写真がスクラップされるなど、頁を眺めるだけでも飽きない充実した内容となっている。

「會寶」は、美協を知るうえで最大の基礎資料であるといえる。

「會寶」に見る美協と美協展の役割

内容についての詳述は次回に譲るとして、ここで「會寶」に見られる、美協と美協展が果たした役割についてあらためて考えてみたい。美協展は佐賀県内における総合美術展覧会の嚆矢であり、展示方法等、展覧会のスタイルは官展に倣ったものであった。ことに洋画を大規模に紹介したという点では、洋画についてすでに図画教育や報道等で知る素地があったにせよ、実見できる機会がまだごく少なかった佐賀県の人々にとっては、まさに画期的なできごとであったはずである。

そして「會寶」には、当時の出品作家の絵画に対する美意識や価値観（いわゆる絵の“見かた”）とともに、感嘆ととまどいを交錯させながら絵をみつめる鑑賞者の様子がしばしば書かれている。そこには観せる者と観る者、それぞれの態度がはっきりと見て取れ、好事家のみならずより広範の人々を巻き込んだ、美の提示と享受の関係の形成、啓蒙がなされたことがわかるのである。こうした具体的な実感をそなえた美協関係資料は、「會寶」をにおいて他にない。

美協展は美校出身者や官展出品者が指導的役割を果たし確立された、地方における作家の発表の様式、システムとしての場であり、それは、東京と地方の美意識のギャップを埋めるものとしても機能した。後年、一般公募制に転じてからは、よりそのことは明確になっていったと思われる。

（学芸員 野中耕介）



図1 佐賀美術協会「會賀」第1号表紙。
20.3×16.1cm
第1号は1916（大正5）年第3回展～1918（大正7）年第5回展までの記述となっている。



図2 第2号、1919（大正8）年第6回展、9月7日の記述から。「敬意を表スルノ因」初期の美協展では、東京美術学校の所蔵品や教師等関係作家の作品が参考出品された。この年、岡田三郎助（三保松原）《舟道より蘭島を望む》《界田の雪》、藤島武二（朝鮮風景）等が出品されている。それらを前に感謝をささげ一礼する出品者たちの姿が描かれている。



図3 第2号、1920（大正9）年第7回展、7月8日の記述から。当日の受付当番者による画家たちの肖像。また、北島浅一の渡欧に際し、その祝賀会をおこなう旨が書かれている。



図4 第3号、1931（昭和6）年第15回展、11月11日の記述から。「拙き三角形問題 当局のキイにふれパステルにて修正ときた」佐賀県における裸体画問題は、公募制となった美協展でおこった。下村源吾の《探婦像》に対し、警察から修正を求められたのである。



図5 第2号、1924（大正13）年第11回展、7月6日の記述から。作者不明のスケッチ。淡彩による著色がなされている。美協展には女学生や役人、警察官といった様々な人々が訪れたと記されている。

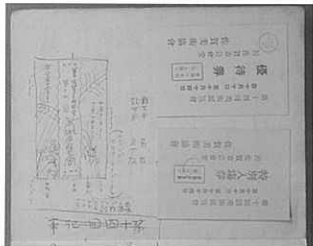


図6 第2号、（大正9）年第7回展、7月8日の記述から。右は当時の美協展の入場券。左は看板のアイディアスケッチ。

平成17年度 博物館・美術館主催の展覧会

■特別展 会場：美術館2・3・4号展示室 <有料>

秋に行われる一番大きな展覧会です。今年度は考古の文化庁巡回展と地域展をあわせて開催します。

11月 1日(火)～11月27日(日) 「発掘された日本列島2005/肥前国風土記の世界」

■常設特別展 会場：美術館2・3号展示室 <無料>

夏期と冬期に行われる展覧会です。小さな子どもから大人まで楽しめる展覧会を開催します。

7月15日(金)～9月4日(日) 「理科室の住人―標本の世界を探検!―」

2月3日(金)～3月5日(日) 「洋画のまねび―描くことの近代―」

■博物館テーマ展示 会場：博物館3号展示室テーマ展示コーナー <無料>

4月12日(火)～5月15日(日) 「きものと美人画」―工芸―

5月17日(火)～6月26日(日) 「佐賀の儒学者」―歴史―

6月28日(火)～8月7日(日) 「祭りの造形～仮面と楽器～」―民俗―

8月9日(火)～9月21日(水) 「山水にあそぶ」―美術―

10月13日(木)～12月4日(日) 「近代の屏風絵」―美術―

12月6日(火)～1月15日(日) 「ドイツ年記久米邦武と『米欧回覧実記』」―歴史―

1月17日(火)～2月26日(日) 「書家・中林梧竹の絵画」―美術―

2月28日(火)～4月9日(日) 「生き物のふしぎを見ようIII」―自然史―

■玉手箱 会場：美術館1号B展示室 <無料>

今回から新しく、博物館・美術館が所蔵する選りすぐりの名品を紹介します。

4月12日(火)～5月22日(日) 「岡田三郎助 富士をえがく」

5月24日(火)～7月3日(日) 「蘇った絵画」

7月5日(火)～8月7日(日) 「長沢芦雪筆 唐獅子図屏風」

8月9日(火)～9月21日(水) 「青木繁 佐賀哀情」

10月13日(木)～11月27日(日) 「中林梧竹 五言絶句連幅」

11月29日(火)～1月15日(日) 「中世の写実 木造円鑑禅師像」

1月17日(火)～2月26日(日) 「鏡・玉・剣」

2月28日(火)～4月9日(日) 「黒田清輝と藤島武二」

■肥前刀 会場：美術館1号A展示室 <無料>

■コレクション展・テーマ展 会場：美術館2号展示室または3号展示室 <無料>

4月15日(金)～5月15日(日) 「平成16年度新収蔵品」

〃

「とびだせ絵はがき! 名品選」

7月1日(金)～7月10日(日) 「夏にみる織(のぼり)」

3月10日(金)～4月9日(日) 「松本弘二と池田幸太郎」

〃

「歿後300年 藩主・鍋島綱茂の書画」

佐賀県立博物館・美術館報 第134号

平成17年3月25日

編集発行 佐賀県立博物館・美術館

〒840-0041 佐賀市城内1-15-23 ☎0952-24-3947 ☎0952-25-7006

ホームページアドレス <http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kankobunka/k-shisetu/hakubutu/index.html>

E-mail hakubutsukan-bijutsukan@pref.saga.lg.jp

印刷 大同印刷株式会社